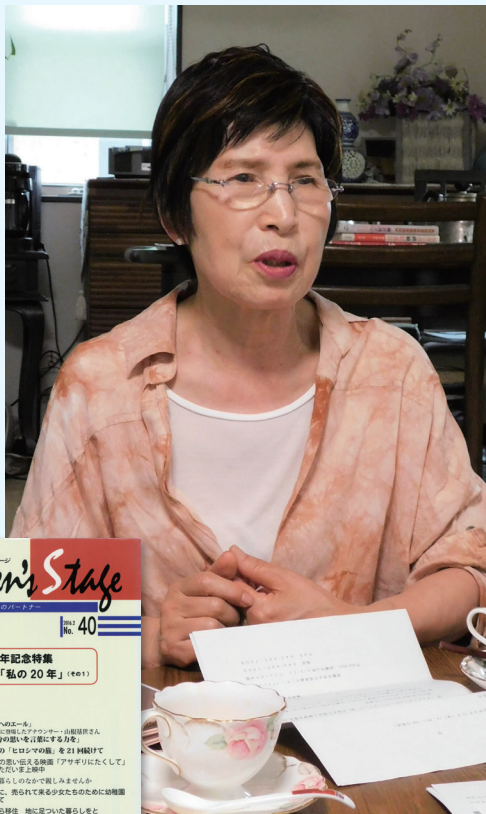


# 「今」の自分を発信し、みんなとつながりたい

女性誌『ウイメンズ・ステージ あなたのパートナー』編集長

スペース「すてーじ・刻」、エッセイ塾主宰

瀨谷道子さん

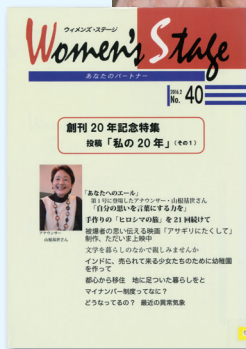


## ◆新聞記者になろうとした動機

私は団塊世代です。戦争が終わり、民主主義が始まるとういう時に育ち、自分が志すことをやってみたいと言えた時代でした。でもそう単純にはいかず就職できなかったため、たまたま見た新聞社の求人に応募。思うことが書ける魅力に惹かれ、記者になりました。

## ◆仕事と家庭との両立

30年以上、新聞記者として勤めました。当初女性記者は少なく、管理職時には男性の部下に苦労することもありました。記事という伝えるべき武器がある仕事の魅力は代えがたいもの。好きな仕事を手放さない覚悟が大切だ



と思います。

周りが変わらなければ自分が変わるしかない。常になんのために記者であるのかを問い、人として伝えたいことを書き続け、力をつけました。

人からも学ぶことの多い記者生活だからこそ、人生で岐路に立たされたとき望んだ選択が出来た気がします。さらに男だから、女だからという目でモノを見ない夫が、応援してくれていたことが大きかったですね。

共働きで、子どもが小さい頃は親同士のネットワークが強く、保育園のお

迎えも、頼みあったり、服を回したり。その付き合いは今も続いています。最近では、親同士の仲はよいけれど、家庭内のことをお願いするのは、壁が高いのかもしれないですね。人はひとりでは生きられません。互いに迷惑をかけたつ、かけられつつ生きていけるといいですね。

## ◆『ウイメンズ・ステージ』や『すてーじ・刻』を始めた理由と、読者の対象を40代からにしたのは

マスコミも男尊女卑が根強い世界です。黙ったままでいるのか。冗談じゃない。書きたいものを書く場を作ろうと、女性の新聞記者仲間と声をかけてスタートしました。期待するものがなかったら自分が作ればいいのです。

女性誌は自分たちが会いたい人に会い、知りたいことを書いていく。読者対象を40代からにしたのは、始めた当初の自分が40代だったからです。常に自分の年齢にあったものを取材し、流行を追ったり誰かに迎合することはしません。だから広告もとりませんが、口コミで全国に広がり、23年目。現在47号を発行しています。スタッフはドタバタキャンオーケー、家庭の事情もあるので縛らないし、発行経費のみで運営します。それは大変ですが、自分がやりたいと思うてやるのだから、やれる

範囲でいいのです。スタッフはまじめでやさしく、懸命に頑張る人、自分がやりたいという人が担ってくれています。

「すてーじ・刻」は、読者の集まる場所が欲しいとの声に応えて作りしました。「刻(とき)」とはいいときを過ごすこと。「あなたの出番です」という意味もあります。力量はあるのに出番のない熟年女性がたくさんいます。そんな方たち場所を提供し、ともに交流しています。

## ◆瀨谷さんが影響を受けた言葉や作品などについて

画家の故・堀文子さんの言葉で、「群れない、慣れない、頼らない」というのがあります。堀さんにインタビューしたとき、「1ミリでも明日成長したい」と言われ、忘れられません。今の自分の年齢で必要なものをやりたいし、今の自分をまず肯定していきたい。そこからしか始まらないと思いますから。(高橋た)



「すてーじ・刻」のオペラミニコンサートと、エッセイ塾から生まれた作品の一部